

ロスコの部屋

上村信広

「死に対する明瞭な関心が無ければならない。命には限りがあると身近に感じること」
(マーク・ロスコ)

川の水を飲み込むところで目が覚めた。最近また夢に出てくる。俺が育った街には大きい川が流れていた。夏になると、その川で泳いで遊んだ。川の流れが速かったから上流に向かって泳がないと流されてしまう。息が切れるまで手で漕ぐうちに力尽き、川の水を飲み込みそうになりながら下流の溜りまで流される。子供たちにとってその遊びはスリルに満ちていた。ただ夢に出てくるのは、楽しかったことよりも溺れる瞬間の恐怖ばかりだった。

「もしもしー、もう真純マキマキが来ているよ」
店のアルバイトからの電話だった。顔も洗わず昨日の

シャツとズボンに手足を通して出掛けた。

俺の店は、福岡市の繁華街・中洲から那珂川を挟んだ向かいにある。そこは西中洲と呼ばれ、この街には高いビルもネオンもない。福岡大空襲の難に遭わず昔の面影を残している。ここでジャズ・バーをして二十数年経つ。場末のバーのような店だから、馴染みの客か余程のもの好きしか来ない。

「マスター、『ロスコの部屋』の三周年だから張り切ってきたのに、典明さん、まだ？」

「典明さんはさっき来て、また出て行ったよ。病院に」
アルバイトのミズホが乾いたグラスを片付けながら答えた。俺はまだ夢から立ち直れず、トマトジュースと厚く



切ったトーストをミズホに頼んだ。

真純はジャズに転向してから、うちの店でも歌うようになった。週に一回「ロスコの部屋」と題して、典明とのデュオライブをしている。

真純の三十歳誕生日を記念したライブを「真純の部屋」としたら、響きが怪しいと常連の客からクレームが出た。店の奥に掛けたマーク・ロスコの絵を見た別の客が、ロスコの部屋と言い出したのを、典明が気に入って使い出した。彼女は、学生の頃からロックバンドとして中洲や天神のライブハウスで歌っていた。そんな真純に声をかけてジャズを勧めたのが吉田典明だ。いままでも連れてきた娘がいたが、三年も続いているのは真純だけだった。

典明は三十代の頃、ヘレン・メリルの日本ツアーにピアニストとして同行した。ニューヨークの溜息といわれた彼女のハスキーボイスを間近で聴いた典明は、真純の声に同じ夢を見たといった。ハイトーンで歌ったあとにこぼれるトークは、さつきまでの熱が冷め、静かで穏やかな低音に変わるのだった。

♪ cry me a river —

真純はピアノに向かってハミングしながらコードを押えていた。先週のライブが終わってから、珍しく典明に説教

されていた。それが応えたのか早めに店に来て準備をしていた。

疲れた顔をして典明が戻ってきた。黙ったままピアノに向かい、それからは真純と二人で選曲やアレンジを話し合っているようだった。

「よいしょっと」

川辺の爺さんがベースを引きずるように階段を上ってきた。

「玉ちゃん、この階段どげんかならんね」

「どげんもならんねえ。この階段が爺さんの元気のバロメータたい。上れんごとなつたら引退たい」

俺の名前は児玉。名前のことを聞かれるたびに、児玉清の隠し子だと嘯うそいてきた。川辺の爺さんにはこの店を引き継いで以来、随分と世話になってきた。背中にはマリア様を祭っている。そんな過去も聞いたが、俺以外に見た者は少ない。

「真純ちゃん。風邪ひきじじいを無理に呼んだら困るねえ」

「無理言つてごめん。今日はどうしても爺ちゃんのベースが欲しくて。ごめん」

真純は爺さんの肩を、後ろから両手で抱いた。

「今日の譜面」

典明が爺さんに向かってぶつきらばうに楽譜を渡した。今では偉そうにしている典明だが、彼も爺さんの世話で飯を食えた時期があったことを俺は知っている。

——典明は、福岡の高等学校では花園を走り回ったラグーマンだった。早稲田に進んだが、直ぐにラグビーを辞めてジャズの道に入った。横浜でサクソ奏者をしている叔父への憧れがあり、進学を機会にそこへ下宿した。

母親から手ほどきを受けたピアノには、それなりの自信があったようだ。叔父に付いて横浜や東京のジャズ喫茶を回り、三年生の途中で中退してアメリカへ渡ったことは聞いた。だがアメリカでのことはあまり話そうとしない。

「いらっしやい」

酒屋の娘が配達に来了。男でも重たいビールのカートンの上にウイスキーやつまみ類を載せて階段を上がってきた。

「ビール一ケースとローズのブラックだったね」

伝票にサインを貰うと、逃げるように駆け下りて行った。

——帰国して暫くは横浜にいた。横須賀のライブハウスで客を殴り、警察の世話になった話は何度も聞いた。

ボーカルの女にちよっかいを出そうとした男を殴り倒したのだが相手が悪かった。米兵だったのだ。典明は、殴っておらずタックルしただけだと今でも言っている。

「真純、爺さん、『Honeysuckle Rose』頭からリハイくよ」

典明の合図に爺さんのベースのソロでリハイサルが始まった。酒の肴程度のライブに、普段はリハなどやることはない。真純のために特別だった。

「いやーしく歌えよ、マスマミ」

爺さんが真面目な顔で揶揄する。この歌は、男を絡めとるような女の歌詞なのだ。ニコラス目から典明のピアノが入っていった。爺さんのベースが、時を刻むように響く。

「マスター、和田に調律頼んどいてくれ」

典明が皆を押しつけるように呟いた。典明は神経質なくらい調律師の和田に注文を付ける。俺は面倒だから空返事で答えた。

「わかった。今日のマスマミはどうね」

「んっ、いいんじゃない」

典明がこういう言い方をするときには、かなりストレスを感じている証だ。真純に不満なのだ。

「典明、何か飲んだらどうや」

「そう、バーボンのホットとタコス」

典明がピアノのキーを弄びながら考えるように答えた。彼の身体に強い酒を勧められはしないのだが、今夜だけは薄めにして出した。

こうして今夜も典明や爺さん、真純、そして集まった客を、壁に掛けたロスコが見ていた。

暖冬から一転して翌週は寒波が襲った。今年も終わろうかというのに、俺を襲ってくる夢は終わりそうになかった。重たい身体を引きずって今日も店を開けた。

「先週はごめんね。来られなくて」

黒い皮のコートに花束を抱えた山本が来た。

「遅くなったけど、これ、お祝いだ」

「山ちゃん、ありがとう。こんな山ちゃんだけよ」

真純は顔を紅潮させて、受け取った花束にキスをして見せた。

「こんどの作品では真純を主人公にしようかな？」

作家として売り出し中の山本は、リップサービスが過ぎる。地元放送局でプロデューサーをしていた頃からそうだった。

ホットのウーロン茶を捧むように両手で抱え、真純が山本に話しかけた。

「山ちゃん、このまえのロスコのこと、もう少し教えてほしいんだけど」

真純のライブを「ロスコの部屋」と名付けたのは、この山本だった。

ジャズ喫茶にお決まりのアート・ブレイキーやマイルスの白黒写真などは貼っていない。インテリアといえ、こ

のロスコの絵一枚だけだ。上三分の二は黄色、下三分の一は汚い赤に塗り潰され、周囲が僅かな幅だけ濁った黄色である。薄暗い店の片隅で、この絵が部屋の空気を温めている。俺がマーク・ロスコという画家に出会ったのは米国だった。

大正の終わり頃、サンフランシスコへ移住した父の叔父にあたる児玉源治は、現地の日本人向けに、日本から持ち込んだ生活雑貨を手広く扱って成功した。今は三代目となりスパーも経営していた。

俺がその会社の世話になる切っ掛けは、一九七三年のオイルショックだった。イスラエルとアラブ諸国の間で起きた中東戦争の影響で、原油価格が高騰したため超インフレが発生し、新卒採用が激減した。

大学で美術史を専攻したが、就職の役には立たずアルバイトを転々とするその日暮らしの状態だった。親父はそんな俺のことが目障りだったのか、この会社に勤めている父の弟と出稼ぎの話が出来上がっていた。俺も特にしたくない仕事もなく、二つ返事で米国へ飛んだ。

会社事務所はパークレーにあった。移住した頃は隣のオークランドに居たらしいが、治安の悪化で安全なこの街へ移ったという。近くには広大な敷地を持つ大学があり、

緑の多い街だった。

叔父の児玉史郎はスーパー部門の経営にあたっていた。地価の高騰で新規の出店はしだいに厳しくなっていた。史郎がまず俺に与えた仕事は、秘書のジュエシーを手伝うことだった。

ジュエシーも日系で黒髪の美しい中年だった。愛嬌は無かったが仕事をきっちりこなし、やることに無駄がなかった。初日から間違いない俺を手足のように使いまわした。早口の英語が解らず、初めは戸惑ったものだ。とにかく彼女の指図を聞き逃すまいと一生懸命だった。半年もすると電話への対応もそれなりに出来るようになった。

サンフランシスコへ渡ったら行きたい所があった。或る週末ジュエシーにその場所を聞いた。

「ジュエシー、近代美術館へ行きたいんだが近くかい」
「ルート80でサンフランシスコ湾を渡ったところよ。すぐわかるわ。私にランチをご馳走する条件付きなら案内するわよ」

S F M O M A (サンフランシスコ近代美術館)までジュエシーの運転するフォードで向かった。車のラジカセからはピーター・ポール&マリーが歌う「サンフランシスコ・ベイ・ブルース」が流れていた。

「日本からのお客さんを案内するときにかけるのよ。歓

んでくれるわ」

俺にもジュエシーなりのおもてなしだったのかもしれない。昼食に案内してくれた中華街のランチは最高に旨かった。ジュエシーは美術館の中が相当退屈らしく、付き合ったのは案内してくれた初日だけだった。この日から休みになると、ひとりでごこへ足を運んだ。

S F M O M A は、ニューヨークのM O M A と並び近代現代の作品を中心に収集展示していた。そのころ日本では、米国の現代美術作品が紹介される機会はまだ少なかった。

俺が米国の作品に夢中になる切っ掛けとなったのは、アグン・ド・ウオーホルのポップアートだった。美術雑誌から切り抜いた彼の代表作、マリリン・モンローのシルクスクリーンを部屋の襖に貼ったものだ。ポップアートが芸術というカテゴリーの枠を抜け、美術館の展示室から作品たちを開放するような新しい風を感じたものだった。

大学の卒論にも書いた。「米国現代アートの心理的考察とコンパス」なんていう平べったいものだったが。

そう、ロスコに出会ったのもこの美術館だった。

いつも俺を支配している時間や音はエントランスの外に置き去りにして、アートの森の中へ足を踏み入れるのだ。

針金や鉄、プラスチックを使った彫刻の森の中を歩くのだ。作品たちは、美術評論に囚われがちな自分を、救い出して

くれた。

ロスコの作品は、二階にあった。縦位置のキャンバスを二色に塗分けたものだった。上三分の二は赤く、下三分の一が濃紺の壁のようで、周囲は黒く塗り潰されていた。古い壁のようにも見える作品は特に心に留めることもなかった。そんなロスコが俺の中に落ちてきたのは、十数回も通った熱い夏だった。

日本のように湿度が無いとはいえ、店舗の建築現場になると皮膚が焼けただれるほど太陽を間近に感じた。開店日も決まり、現場を投げ出すわけにはいかなかった。そんな中、夕方からSF MOMAへ出掛けたことがあった。夜九時まで開いている日だったからである。

その夜は、まっすぐアンディ・ウォーホルの作品へ向かった。「キャンベルスープの缶」は、三十二種類の缶詰が整然と並んだシルクスクリーンの作品だ。どれも赤と白の同じデザインなのだが、よく見るとオニオン、ビーフ、トマトとそれぞれの缶の中身が違う。色、味、香り、そして缶を開けるアメリカ人の顔まで浮かんできて、いつしか自分の表情が崩れていることに気づく。いつもそうだ。

「よくお出ですすね」

このフロアーで監視員をしている女性だった。

「もうすぐ閉館ですよ」

そこに一時間以上座っていたらしい。もう夜九時前だった。階段を二階まで下りたときにフロアーの奥に、あのロスコの作品が見えた。自分の置き忘れのように近く感じたことを覚えている。

それから新店のオープンまでの三十日間は忙殺された。壁の色が指定したものと違うし、ショーケースの寸法が違う、そんなことがしょっちゅうだったから、怒鳴ることに疲れていた。

なんとか予定内に内装まで完成し、店長に引き渡した後は一週間の休暇を貰った。

買ったばかりの中古のジープに、自分で握ったおにぎりとビールにペーパーバックを持ってフィッツシャーマンズパークへ出掛けた。

日本から持って行った釣り具にイカの切身をつけて湾へ向かって投げ込み、引きが来るのを待つあいだ車のシートで昼寝をして過ごした。アイマスク代わりに顔に乗せたペーパーバックが、さらさらと潮風にめくれた。まどろみはじめた瞼の中に、あのロスコの黄色と赤が何度も交叉していた。

翌日、魅かれるように、SF MOMAの二階展示室へ向かった。

ロスコが、フロアーの奥から俺は逃げはしない、ここに

いと静かに呼びかけた。

大抵の抽象画は、何らかの形状を組み合わせることで表現しているものだが、そのようなものは一切ない。形といえば四角いキャンバスと上下に区切られた色彩の違う長方形だけである。

それはただ壁でしかなく、——壁の中に魂を取り込んでゆき、観る者の存在それ自体を自覚できなくする——そんな感覚に陥る。ロスコがあらゆる精神、色、音までも包含してゆくブラックホールでもあるかのようなだった。

「どうしたんだ？ ロスコが」

「マスターがどうして掛けているのか最近とても気になるようになったの、あの絵」

山本と話すときは、真純の口から方言が消える。俺は山本に、ドライマティーニとブルーチーズをのせたフランスパンを出した。禿げ頭に似合いはしないが、いつもの注文だ。

「何ていうか、ただの塗り壁みたいな絵なのに遠くったり近くなったりするのよ。今日は近いかなっ」

山本は笑いながら

「そう、遠くなったり近くなったりね。おもしろい」

「ねえ、山ちゃんにはどう見える？」

山本がグラスに口をつけて唇を横に引いた。

「真純の感覚って、良いところって思うね」

「ロスコって画家はね、たしかロシアで生まれたユダヤ系だった。ユダヤ人に対してはロシアでも差別や迫害があったらしい」

「なんだかナチスのことみたいね」

「それで、一家で米国へ移住している。子供の頃父親が死んで家計が苦しかったんだろう、新聞売りをして学校に通ったそうなんだ。それでも真純より勉強したんだろうね、エール大学で教育を受けているから」

「エールって」

「あのクリントン大統領の母校っていえばいいのかな」

米国のエリート校さ」

「すごい、そんなエリートなのに画家に」

山本が外国人のように手振りを入れて喋った。

「私も専門家じゃないから詳しいことは知らないよ。たしかニューヨークの美大に入ってから絵を始めたんだよなあ、マスター」

「流石、山ちゃんは俺より詳しくかね」

「でも何であんな塗り壁みたいな絵を描いたのかなあ」

あれ、絵なの？」

真純がカウンターの中に来て、グラスにウーロン茶を足

した。

「塗り壁か、確かにな。でもよおく見てみ。何回も何色も色を重ねるところおが」

「その一色一色ば人の魂と思えば、真純の不思議が見えるかもしれないね」

「マスター、それってソウルよね、魂。ソウルの画家、ロスコか」

真純があらたまつたようにロスコの方を振り返つた。

午後八時前、典明がやって来た。赤いマフラーを首から取ってピアノの椅子に掛けた。

山本との話はそこで途切れ、真純は典明と今夜の曲の打ち合わせを始めた。

「典明さん、今日は八曲お願いしますね」

楽譜の束を受け取つた典明が、パラパラめくつた。その夜のライブはデュオだった。俺はカウンターの客の相手しながら、ピアノの前の典明を目で追つた。

典明が右手の軽いタッチで「Satin Doll」を弾き始めたときにはほっとした。

サンフランシスコでの暮らしも一年いれば慣れてきた。

ロスコとの出会いから一年、夏休みに初めてニューヨークへ飛んだ。もちろんMOMAニューヨーク近代美術館を楽

しむためだ。ここにどうしても見たい作品があった。

アンリ・マティスの「ダンス」だった。巨大なキャンバスいっぱい五人で輪になって踊る娘が描かれている。

ピカソにゴッホもシャガールも十分楽しんだ。でも俺はその「ダンス」だけで十分だった。

こうしてアメリカで仕事を貰い、気ままにアートを楽しんだ八年だった。叔父の児玉史郎が、心臓の発作で病院へ担ぎ込まれて二日目、あっけなく他界してしまった。

叔父は何も出来なかつた俺をビジネスの世界で鍛えてくれた。プロジェクトを与えたらとにかく自由にやらせてくれた。新店舗の施工業者の選定のときも、各社回つて自分の眼で選べと経験を踏ませてくれた。自分の可能性を拓けるには、最高の教師だったと思う。

新天地といわれ移住した日本人は、実際は日本から放り出されたも同様だったと聞いた。誰もが自分の眼で見て、自分で考え、自分を信じて生きてきたに違いない。俺にも自由にやれというなかで、外国で生き残る厳しさを教えてくれた。父だったら出来なかつたくらいに信頼をして任せてくれた。

急に支えが無くなったように不安が俺を包み込んでしまった。頼れるものがなかった。仕事だけでなく、姉のように接してくれたジェシーに相談をして、日本へ帰る決意

を固めた。

帰国して暫くは、毎日釣りをして過ごした。幼馴染で呉服屋を継いでいる洋輔からボートを借りた。博多湾の遠浅の砂地ではフライにするにはちょうど良いサイズのキスがよく釣れた。

一カ月ばかりした頃、大学の同期の連中が帰国報告会をしると飲み会をやってくれた。学生時代によく利用した箱崎のスナックを貸し切っていた。

取り寄せの寿司桶を摘まみながら、アメリカでのことをしゃべらされた。英語もまともに出来なかつた俺が、一番勉強した時期だったように思う。ところが、日本に帰ってみるとまるで浦島太郎のようで八年のブランクは大きかった。同期の皆はそれぞれに自分の椅子を手に入れていたが、日本に帰って来て何をするのか、なにも考えていない自分がいた。

散会のあと、残った三人で近くのバーに入った。俺以外はまだ家族を持ち、子供の話やカミさんのグチになると、少し飽き飽きした。最終の電車に合わせて店を出た。

まだ残暑の残る九月だった、学生の頃アルバイトをしていたジャズ喫茶を訪ねた。西中洲の奥まったところにあるその店は、戦後のジャズブームの頃開店している。当時は

ここで進駐軍を相手に演奏していたという有名ミュージシャンも多いと聞いた。

「あら、いつ帰ったとー」

新井ママがあつた頃と変わらぬ笑顔を向けた。

「ママ、少し化粧の濃くなつたらん」

「皺を埋めるとにしかたなかるうもん」

何日ぶりだろうか。ママといっしょに大声で笑った。

「待っときんしゃい」

レコード盤に針を落としてから、俺の好きなハイボールを作ってくれた。奥のスピーカーから、ビル・エヴァンスの「Waltz For Debby」が流れてきた。

「先月帰ったばつてん、することもなし、毎日釣りばかり」

「アメリカで頑張りよるつて、お父さんが喜んでつたよ。きつうなつて帰つてきたね」

「んー、そうかもしらんね。」

アメリカで世話になつた叔父が急に死んでね。仕事も慣れたし一人前になつたつもりやつたばつてん、まだまだ頼つとつたんやろ。

社長は、これからやけんアメリカで頑張りうと言つてくれたけど、そこは俺がずつといるところじゃなかうで」

ハイボールのおかわりをした。

「あんたが日本に帰って来たとも、ひょっとしたら私の声が聴こえたのかもしらんねえ」

「ママ、なんかあったとお」

「児玉ちゃん、またこの店ば手伝わん」

「ああ、ママ、俺は良いよ。仕事もしてないから」

俺はママの誘いを受けることにした。

まさか、それから二十年以上も続けるとは思いもしなかった。三代目オーナーだった新井さんは一カ月後、山口の実家へと店を出て行った。

福岡の専門学校を出てデザイナーをしていたママは、この店でジャズの虜になり前のオーナーから店を引き継いだレコードを回すのもそろそろ止めにして、高齢の母と過ごしたいと言った。

ホームセンターで買い込んだ材料を使ってリフォームをした。厨房のガスコンロを買い替え、椅子のガタツキは直したが、テーブルやカウンターはそのまま使った。ただ壁に一枚の絵を掛けた。アメリカを去る前日に、社長がくれたものだ。

「君は毎週ミュージアムに通うほど絵が好きだそうだね。これは少し大きいかもしれないが、頑張ってくれたお礼だ」
社長はそう言って、ロスコの絵をくれた。大きくて本物

かと喜んだが、後からジェシーが複製だと教えてくれた。日本に帰ることを承諾してくれた証だったかもしれないし、社長からのエールだったのかもしれない。

社長に貰ったロスコは、実家の部屋に置いたままだった。この店を手伝いだしてからだ、ここがロスコにとつていちばん相応しい場所のような気がした。

開店前のひと時をロスコと会話するのが日課になった。子供の頃遊んだ川のある風景が広がることもある。学生るとき近くにあった箱崎のわっぱ屋の光景が浮かぶこともある。橋の上から那珂川に飛び込んだ友人だったことも。これまで行き交った記憶の断片がロスコの壁の中から蘇るのだった。

新井さんから引き継いだ地元ジャズメンの中に、川辺というベテランのベースマンがいた。

「玉ちゃん、この階段どげんかならんかいな」
俺のことを玉ちゃんと呼ぶようになっていた。

「きょうは新人ば連れてきたばい」
川辺さんの隣に立ったまま頭を下げた。黒いシャツに赤いネクタイ姿の男は、吉田典明といった。

「やっとアメリカから帰ったとたい。こいつのピアノば聞いてやんしゃい」

口数の少ない男で、「宜しくお願ひします」とだけ言った。

川辺さんは音楽教育を受けたことは一度もなかった。新井ママの話では、若い頃から組の連中と互角にわたり合った愚連隊だったという。初めて入ったキャバレーのバンドマンに憧れるようになり、独学でベースをものにしたと聞いた。

アパートで練習をしていると、珍しそうに窓から覗く大家の息子が吉田だったそうだ。

「こいつが子供の頃な、ベースば弾かせるったい。指の小さいけん音の出らんやろ。おれが弾けば大きな音の出るもんやけん尊敬されとった」

「母親からピアノ習うようになってからたい、俺のベース聴いては難しかことば聞いてくること熱心やった」

「へえ、吉田さんはアメリカの何処におったと」
俺は聞いた。

「はじめはロスにいて、あと転々としました」

彼はモジリアニの描く女たちのように表情が無かった。

「実は俺もアメリカで働いとったんだよ。シスコに八年いたね」

「あつ、そうなんですか。マスターもジャズやられていたんですか」

「いやいや、大学出て就職難民だったけん出稼ぎに行っとった」

その晩、初めて吉田のピアノを聴いた。川辺さんのテンポの良いベースにのせてスタンダードナンバーを数曲弾いた。

ラストにソロで「Autumn In Paris」をバッハのフーガのスタイルで弾き始めた。パリの移ろいゆく景色が俺の背後に流れる気がした。フォービートの軽快なアドリブに切り替えると、プラタナスの歩道を闊歩するパリジェンヌの後ろ姿が現れた。エンドに近づきバッハ調の調べが店の空気を穏やかに包みこんだ。

演奏が終わっても客席は呼吸が止まったままだった。俺が拍手を贈ると同時に一斉に拍手が湧いた。こんなことは店の客たちが、こぞつて吉田にビールをすすめた。

「どげんね、玉ちゃん。よか男やろ。来月から頼むよ」

「川辺さん、何処で見つけて来たと」

「那珂川ば流れてきたとたい」

いつもの悪戯な目で俺の目を見た。

「半月ばっかり前、こいつが中洲でぼこぼこやられよつたとたい。相手の連中は知つとる組のもんやつたけん止めさせたが」

吉田は元ラグビー選手で、相手に怪我させては後の始末が悪いと手を出さなかったという。